

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 15 「神の怒りを引き受けて」(2011年12月4日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけるとなれば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた者は、神に呪われたものだからである。あなたは、あなたの神、主が嗣業として与えられる土地を汚してはならない。(申命記 21:22-23)

あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。「この方は、罪を犯したことがなく、／その口には偽りがなかった。」のしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。(1ペトロ 2:21-25)

## 【説教】

今日は、第15主日、問37-39を手がかりにして御言葉に聴いてまいります。ここは使徒信条で言えば、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」の部分を取っています。前回の説教では、ちょうどクリスマスのところ「聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ」のところでした。使徒信条はキリストの誕生について告白し、その後すぐにキリストの受難につなげます。誕生から受難へ直結している。そうするとイエス・キリストの公生涯はどこにいったのか。気がつかれる人はそう思うでしょう。福音書を読めば、主イエスが伝道を開始され、おそらくは3年程、公の伝道活動をされたことが伝えられています。その中で、数々の力強い説教、奇跡がなされ、多くの人々が主イエスの周りに集まりました。十二弟子の他にも、その周囲にもっと広い弟子の集団があったことも福音書から分かります。そのように多くの人々に影響を与えた公生涯について、使徒信条はまったく触れていません。それよりも、誕生、受難、この二つの事柄にしばっているのです。

キリストの誕生は、マタイとルカの二つの福音書が伝えますが、世界で最初のこのクリスマスの出来事を祝ったのは、ごく僅かな人々でありました。マリヤとヨセフ、羊飼ひ、博士たち、年老いたシメオンとアンナ。しかもベツレヘムの片田舎、その宿屋の馬小屋で、ひっそりとお生まれになられた。ほとんど誰も知らない、この出来事を使徒信条は取り上げます。また受難もそうです。十字架の時に、この主イエスの死の意味を知っていた者はそこにおりませんでした。弟子たちは逃げ去り、そこに立ち会っていた者の多くは異教の神々を拝む人々でありました。遠くでその様子を見守っていた女性たちも、嘆き悲しみ、途方にくれました。

このように人々からは見向きもされない出来事である誕生と受難が使徒信条において取り上げられるのです。でもそれが神の御業がなされている時なのではないでしょうか。それは多くの人々には隠されているのです。誰もその出来事に気付かない。そのような見向きもされないことの中にこそ実は神さまの御業はあらわれるのです。人々の関心の集まるどころ、また何かもてはやされているようなところでは、本当に大事なことは見えないのかもしれない。

以前、ある家庭集會でのことです。未信者の方が「自分は美しいものだけを見るようにしている」と言いました。美しい芸術、音楽等。その人からするとキリスト教はその「美しいもの」の一つということです。確かにキリスト教は、美術にしても音楽にしても非常に美しいものです。世間では宗教でも芸術でもそれは「美しいもの、汚れなきもの」という一つの固定化されたイメージがあります。世の中は汚れに満ちているけれども、そこから逃れるために人は宗教に救いを求めるという構図がそ

こにあります。なるほど世間はそのように信仰を理解しているのだと時改めて知らされた思いがしました。

しかし、もしそういう見方でキリスト教を見るならば、やはりなかなか難しいのではないかと。そういう求め方であればその人は、まずつまづかなければならないと思います。というのも、先ほどの誕生にしても受難にしても、決してそれは美しいことではないのです。むしろ目を背けたくなるような現実がそこにあるのです。12月に入り、間もなくクリスマスを迎えます。クリスマスは何か清らかなイメージがある。しかし、聖書の伝えるクリスマスの出来事は必ずしも美しいものではありません。神の御子は家畜小屋の飼い葉桶に寝かされます。そこは赤ちゃんが生まれるような場所ではありません。初めての子をそのようなどころで、飼い葉桶に寝かせなければならなかった母マリアの気持ちはどうだったでしょう。ヨセフも結婚前に婚約者が身ごもることが起こった。身に覚えのないマリヤの妊娠に彼は悩みました。彼は別れることも考えました。疑いと苦悩に満ちた日々があります。

羊飼ひたちの話もそうです。「夜通し羊の群れの番をしている」彼らの境遇は決して恵まれたものではありません。その仕事ゆえに、律法の求める生活ができない彼らは社会的にも蔑まれた存在でした。そういう社会の片隅にひっそりと生きる人々がそこにおります。また救い主の誕生を聞いた当時のユダヤ領主ヘロデは、自分の地位を心配して、幼子の虐殺を実行します。まさに闇のような現実が渦巻くところがクリスマスの舞台なのです。その闇を引き受けるようにして神の御子がお生まれになられる。

そのことを信仰問答は、実在的に表現しています。問37の前半「キリストがその地上での全生涯、とりわけその終わりにおいて、全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた」キリストの受難はただあの十字架だけのことではない。誕生からすでに始まっていた。その地上の全生涯が苦しみの生涯であった。ですから「苦しみを受け」という一言に誕生から受難までのすべてが込められている。その苦しみこそキリストのこの地上における役目であった。なぜそのような生涯なのか。それは後半部分「この方が唯一のいけにえとして、御自身の苦しみによってわたしたちの体と魂とを永遠の刑罰から解放し、わたしたちのために神の恵みと義と永遠の命とを獲得してください」なのであります。そのために主イエスはひたすらその体と魂に苦しみを負われるのです。

このキリストの負われた苦しみについて、信仰問答は二つの苦しみを表現しています。それは教理的にも非常に重要な点なのでぜひ覚えていただきたいことです。前回のところで受肉の教理について触れました。まことの神さまがマリアを通してま

この人間性をお取りになった。そこにはまことの神さまにして、同時にまことの人間という神人両性という教理が成り立ちます。主イエスという存在の中に神さまと人間の両方の性質がある。それがこのお方の仲保者としての真の意味をそこに与えています。

ここで肝心なことは主イエスの中に二つの立場があるということです。神さまとしての立場と、人間としての立場。この二つの立場において苦しまれるのです。まず人間としての立場から考えましょう。それはこの問37からも明らかのように「全人類の罪に対する神の御怒り」を引き受ける苦しみです。問10ですが「神は生まれながらの罪についても、実際に犯した罪についても、激しく怒っておられ、それらをただししい裁きによってこの世においても永遠にわたっても罰したもうのです」とあります。主イエスが真の人間になられたということは、罪ゆえにわたしたちが当然受けるべきこの神の怒りを一身にお引き受けになられたということです。このことは今日の間答のすべてに一貫していることでもあります。問38「わたしたちに下されるはずの神の厳しい審判から。わたしたちを免れさせるためでした」問39「この方がわたしの上にかかっていた呪いを御自身の上に引き受けてくださった」それはすべて人間としての立場であります。しかもわたしたちが受けるべき苦しみをわたしたちに代わって受けてくださる。その罪の責任をまさに人類の代表となってお受けになられるのです。それによってわたしたちはこの裁きを免れる。そういう身代わりがそこにあります。そのキリストのお受けになられた苦しみによって、わたしたちが苦しまなくて済んでいる。わたしたちは裁かれられないのです。キリストの受難にはそういう意味が込められているのです。

もう一つの苦しみ、それは神さまの立場としてお受けになれる苦しみです。それは人間のこの背き、神さまを裏切り、神さまを捨てるその罪のすべてを引き受けられる苦しみです。問5のところでしたが、人間は「神と隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いている」とありました。神さまが御子を世に遣わされる。それは神さま御自身がこの世に来られるということですが、それはこの人間の憎しみの中へ自ら足を踏み込まれるということです。よくスポーツの試合で対戦する相手チームのところで試合することを「アウェー」と言いますが、まさに敵地アウェーに神さまが入って行ってそこで全人類の神さまへの敵意、憎しみをすべて直接その身に負われるのです。その敵意はまさに十字架の苦しみに集約されています。もちろん公生涯においても、絶えず律法学者やファリサイ派との対立がありました。彼らは主イエスの存在が疎ましく思っています。それは自分たちの正しさの中に、神さまの本当の正しさが入ってきたからです。それが耐えられないのです。だから神さまを捨てる。

またそのようにあからさまに敵対しなくても、あの弟子たちのように無理解や裏切りがあります。主を捨てて逃げさる弱さがあります。そのような人間の神さまに対するすべての背きを主イエスは神さまとして引き受けられる。その神さまへの人間の態度は、実は問38が触れています。「ポンテオ・ピラトのもとに」つまりこの世の権力者によって、それは言わば人間の代表のようなものですが、彼によって、まったく公正を欠く裁判によって裁かれるのです。このピラトにもあらゆる人間の弱さ、無責任さが凝縮されています。公正に裁く立場にありながら、民衆を恐れ、権力の座を保持したいために、罪のないお方を有罪にする。これはわたしたちの神さまに対する態度なのです。わたしたちも自分の立場を守るために、平気で神さまを捨て、神さまを裁くのです。

そのようにして、わたしたちの罪を一身に負って、主は苦しまれ、十字架に向かわれます。十字架については問39を読みましょう。ここは今日旧約聖書の申命記を読みましたが、ここが根拠になります。「木にかけられたものは神に呪われたもの」わたしたちが本来受けるべき神さまの呪い。それを主イエスは御自身が引き受けてくださった。だからわたしたちはもう呪われていない。

人生において様々な経験をします。特にこの年は大震災を経験し、わたしたちの国は大きな試練の年でありました。またそれぞれの生活においても多くの試練があったと思います。時に、自分は神さまに呪われているのではないかと疑いたくなるような苦しみを味わうということもあります。しかしどんなに辛くても、そこに神さまの呪いはないとわたしたちは確信することができます。主がすでにあの十字架の苦しみの中でわたしたちをその呪いから自由にしてくださいました。だから神さまに裁かれ、呪われ、捨てられるようなことはない。「わたしたちの体と魂とを永遠の刑罰から解放し、わたしたちのために神の恵みと義と永遠の命とを獲得してくださいました」のです。今日の御言葉に「あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです」とあります（Iペトロ2：25）このさまよう羊のために世の罪を取り除く神の小羊が与えられました。ここに守られる聖餐の食卓もその恵みを表しています。これはその犠牲、流された血、さかれた体によって、わたしたちは罪赦され、神の恵みと義と永遠の命を生かされていることを味わい感謝したいと思います。お祈りをいたします。

天の父。わたしたちの罪のゆえに、十字架の苦しみを耐え忍んでくださったことを感謝します。そこにはわたしたちの受けるべき苦しみがありました。呪いがありました。でもそれをすべて引き受けてくださった恵みを感謝いたします。この恵みの御業を受け入れ、信じ、そこに生きることができるよう。主の御名によって祈ります。アーメン。